

「そんならヨ貫ヨ百ヨ十ヨ文。」

「えーい、しぶとい奴だ。」

「ほら云た。今ので此錢は俺らがもんだ。」

と落げ。ほうら今のシぶてえシの字で此錢は俺らがもんだなんて云う落語家は、しまつの悪いシれ者で頭からシでも掛け遣り度い。云うまでも無くこんな咄は宵の口のお軽い所で演るんだが、これ丈け親切な注意が拂われて居た。名人の心掛けと云うものだらう。もし夫れ江島屋騷動、安中草三郎、鹽原多助、牡丹燈籠等々所謂圓朝物に至れば云う丈け野暮、未熟な耳で聞たものを廻らぬ筆で見當違いな褒め方をするのは、むしろ故人の至藝を冒瀆するに等しいから遠慮しよう。橋本川柳に此偉大な名跡を譲り、自らは圓翁と改めて紅梅亭の高座に、新圓馬の爲め口上を述る可く高僧の様な姿を現したのを最後に廻轉燒の流行りかけた浮世を見限つて仕舞たのは名残り惜しくも是非がない。

此人今や亡く、その藝風を襲う者又絶えてない今日に成れば、小生は再び頑固に「シの字嫌い。」を拒否する事舊の如し。右復籍及御届候也。

(二四、九、二五稿)

二代目三遊亭圓馬

大正七年十二月十八日没、享年六十四歳
三遊亭圓朝の四天王として圓生、圓遊、圓喬と共にその名を稱された。

明治二十四年三十七歳の時來阪、大阪の高座を勤む上本町紅葉寺に圓型の碑あり。表には翁(圓翁の意)の文字を刻り、裏面には

破らくとなりて音なし古扇

の句を刻む。橋の圓、三代目圓馬の銘がある。

万里記



五人裁さば

さ

笑福亭 松 鶴

三遊亭 志ん藏 繪

へい、一席伺ひますは、五人裁きのお話で御座ります。此處に天王寺附近に百姓久兵衛と申しまして、至つて正直な男で夫婦仲良く暮しておりましたが、久兵衛は四十の坂を越へましたが子供が御座りませぬ。松鶴わたしと一緒に子供が欲しいうてたまりまへんが、さて是ればつかりは人間業でいかぬもので、朝夕此の事ばかりを氣に仕ております。

「ナアもし、どうぞして子供が一人欲しいと思ふけど、お前まへはんに種が無いので」

「阿呆云へ、俺の種が何程なんばようても貴様の畠が悪けりや仕方がない」